

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

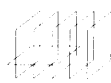
ジャガイモとトウモロコシ：
古代アンデス文明における生態資源の利用と権力の
発生 (生態資源と権力)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2018-05-14
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 関, 雄二
	メールアドレス:
URL	所属:
	http://hdl.handle.net/10502/00009059

ジャガイモとトウモロコシ

古代アンデス文明における生態資源の利用と権力の発生

関 雄二



一 中央アンデス地帯における生態資源をめぐる研究

本論は、南米のアンデス山脈沿いで成立した古代アンデス文明を対象に、代表的な作物であるジャガイモ (*Solanum spp.*) とトウモロコシ (*Zea mays*) をとりあげ、生態資源としての利用過程を示すとともに、これらの作物が複合社会の成立において果たした役割を考察する。この場合、分析の視点としては、近年、考古学で注目されている権力をとりあげる。

中央アンデス地帯(今日のペルーおよびボリビアの一部)の人類学・考古学分野における生態資源の考察は、主として二つの視点から展開されてきた。一つは、文明形成における食糧的基盤との関連からドメスティケーションの時期と過程を追究し、文明形成と結びつけていくものであり、もう一つは、海岸砂漠からアンデス高地、そしてアマゾン源流域、と多様な生態環境を抱える中央アンデス地帯における資源利用の特徴に絞るものである。前者が本論と大きく関わる視点ではあるが、後者についても少し説明をしておこう。

研究の発端は、アメリカの人類学者ジョン・ムラが「垂直統御」(Vertical Control)の概念を提唱したことによる。中央アンデス地帯の自然の特徴は、一言でいうと、アンデス山脈が内陸部で急激にそそり立つため、比較的狭い範囲内に多様な生態環境が分布している点にある。ムラは、こうした垂直方向に分布する生態資源の利用方法に着目したのだが、彼の研究対象は、現代アンデスの事例ではなかった。十六世紀、すなわちスペインによる征服後に記された地方視察吏の記録をもとに、ペルー北高地のワヌコ地方に住んでいたチュパチュと呼ばれる民族が高度でいえば中間地帯に居を構えながら、上方の高地高原と下方の温暖な谷間とを移動しながら生態資源を開発したことを明らかにした [Murra 1972]。

さらにムラは、別の垂直統御の形態をティティカカ湖西岸に住んでいた民族ルパカの事例で示している [Murra 1975]。ルパカの拠点は高地高原にあったため、他の生態環境ゾーンの利用はダイナミックな形態をとった。海岸地帯まで十日以上もかけて旅をし、温暖な谷間でトウモロコシ栽培と海産物採取に従事していたというさらにアンデス東斜面にまで足をのばし、木材や嗜好品のコカ (*Erythroxylum coca*) を入手していた点もわかった。

このムラの研究が刺激となり、現代のアンデス住民の生態資源利用に関する研究が始まったといってもよい。特に一九七〇年代から一九八〇年代にかけては、垂直統御を行うさまざまな集団の姿が明らかにされた [Brush 1977; Masuda et al. 1985; Webster 1971 など]。

これにやや遅れて垂直統御論の影響を受けたのが考古学分野であった。じつはこれまで「垂直統御」を垂直方向に分布する生態資源の単なる利用のように紹介してきたが、ムラの研究の主眼は、むしろ生産と流通を統御する政体の形成にあった。その意味で過去の政体の生成を扱う考古学とのつながりは大きく、考古学者は垂直統御の起源を追究し [Lynch 1980]、先史文化の解釈のモデルとしても援用してきたのである。

さて本論に大きく関わるもう一つの視点に戻ろう。ドメスティケーションと文明の食糧基盤の観点である。中央アンデス地帯が栽培植物の揺籃の地であったことはよく知られている。この過程が、生態資源の分布と関連している点は、さまざまな研究者が指摘してきた。たとえば、トマス・リンチは、メソポタミア地域での植物の栽培化を説明したケント・フラナリーの理論をアンデスに適用している [Lynch 1973]。フラナリーによれば、異なる環境を開発する集団間の資源交換により、それまでうまく生育しなかった野生植物が生育に最適な場所へと移り、やがて人間にとって魅力的な栽培種として生き残るのだという [Flannery 1965]。一方でリンチは、アンデスの場合、交換ではなく、人間や動物によつて種子が運搬される点、植物の成熟期の相違とそれを利用する人間の移動の組み合わせの中で、無意識のうちに人間にとって有利な植物の選択が行われる点を重視する。ここには垂直統御の視点が含まれているとも考えられる。実際に、垂直統御の観点から、農耕の発生過程を追究する考古学プロジェクトもかつて実施されている [MacNeish et al. 1968 など]。

一方で、完成された栽培植物の利用は、古代文明の形成過程の研究でも主役の地位を占めてきた。灌漑などを通じた集約的農業や食糧基盤と関連した作物としてである。この種の生業を主眼に置いた文明論の展開は二十世紀半ば頃にさかのぼり、その中心には、つねに新進化主義人類学者がいた。そのリーダーの一人であるジュリアン・スチュワードらは、南アメリカ全体を視野に入れたその著書『南アメリカの先住民』の中で、ヨーロッパ人による征服時の諸社会の形態と自然環境、生業との関係に注目し、社会進化のモデルを構築している [Steward and Faron 1959]。このモデルによれば、中央アンデス地帯における国家の成立は、集約的な灌漑農耕を可能にした海岸の乾燥砂漠と湿潤な山岳地帯という所与の自然環境があったからということになる。逆にアマゾン低地の熱帯雨林の環境下では、灌漑農耕よりも焼畑農耕が適しているため、国家段階の社会は出現しなかった。すなわち古代アンデス文明の成立を灌漑農耕の発展と関係づけようとする見方であり、ウィットフォードの灌漑理論

と連動していたこともよく知られる [Wittfogel 1957]。

1 トウモロコシの特権的地位

こうした文明形成論の中で、まず言及される生態資源といえばトウモロコシである。トウモロコシが注目されたのは、大規模な灌漑遺構が確認されているのが海岸地帯であり、今日、灌漑水路にトウモロコシ耕作という組み合わせはありふれた光景だからであろう。こうしたトウモロコシへの重視は、その後もアンデス考古学の中に根強く残っていく。

ウインデル・ベネットは、「汎ペルー伝統」という概念を提唱したアンデス考古学者である [Bennett 1948]。彼のいう中央アンデス地帯の「伝統」とは、多様な文化が存在しながらも、時代や地域を超えて互いに影響しながら連続していくものと定義される。具体的には、基礎となる生業として農業と牧畜があげられ、農作物としてトウモロコシ、ジャガイモ、キヌア (*Chenopodium quinoa*)、マニオク (*Manihot esculenta*)、マメ類 (*Leguminosae*)、ピーナッツ (*Arachis hypogaea*)、カタバニ科のオカ (*Oxalis tuberosa*)、トウガラシ (*Capiscum* spp.)、カボチャ (*Cucurbita* spp.)、ワタ (*Gossypium* sp.) や果実がこれに含まれるという。

また、この「伝統」概念と作物のリストは、アンデス考古学の重鎮ゴードン・ウィリーも踏襲し、著作の中で繰り返し言及している [Wiley 1971]。両者ともに、このような多様な栽培植物の名をあげてはいるのだが、しかし記述の端々で強調するのは、常にトウモロコシなのである。

トウモロコシに特権を与えてきた理由は、灌漑理論のほかにもいろいろと考えられる。征服後に記された歴史文書にトウモロコシが頻繁に登場することもその一つであろうし、古代文明の研究そのものが、旧大陸で発達してきたことも関係しているよう。旧大陸ではムギ類のように、単位面積あたりの収穫量が多く、乾燥した実が貯蔵

や運搬に有利な穀物の類が、食糧や余剰生産物の基盤として確固たる地位を確保してきたため、アメリカ大陸でも、穀類であるトウモロコシに関心が集まったのである。伝統的なマルクス主義的文明史観では、余剰が複合社会、さらには文明を生み出すという単純な図式が描かれてきたことからすれば、貯蔵が可能な穀類に目が向くのは自然であった。

もっとも、この旧大陸からの視点に基づく推測が、あながち的はずれとはいえないのは、実際に中米では、当のトウモロコシが栽培化され、主食の地位を占めたばかりでなく、テオティワカン、マヤ、アステカといった古代社会を築き上げる原動力となったことが考古学、歴史学の面から検証されているのである。むしろ、この中米の状況が、考古学でやや遅れをとる南米に対して、無批判にトウモロコシのイメージを照射してきた可能性はある。

ではいったい、このトウモロコシ重視のどこに問題があるというのであろうか。じつは、現在のアンデス地帯で、食糧として重視されているアンデス原産の作物が別に存在するのである。根裁類のジャガイモである。この現状と古代文明についての語りとのギャップは、日本でも見受けられ、民族植物学者の山本紀夫は、「再三にわたり問題視している」〔山本 二〇〇四〕。

山本によれば、日本の歴史教科書では、アメリカ大陸の古代文明の食糧基盤をトウモロコシと記すものが大半であり、また考古学や民族学の専門書でさえも、これに同調するような記述が多々認められるという。考えてみれば、専門書の多くが、先述した欧米考古学者の研究成果を引用したものが多いためであるから、この齟齬は当然の帰結ともいえる。

さらにジャガイモが等閑視されてきた理由としては、山本が指摘するように、戦中の代替食糧というジャガイモに対する負の記憶が影響している日本独自の状況に加え、デンプンを主体とするジャガイモが考古資料として

残存しにくいことなどもあげられる。

もちろん山本の指摘を素直に受け入れつつ、トウモロコシを無批判に重視してきたアンデス考古学のメタ研究が必要であることを認めるにやぶさかではないが、食糧基盤がトウモロコシかジャガイモかというような類の議論は、現在のアンデス考古学や複合社会の分析で展開している議論とはいふんずれていることも事実である。本論では、権力という別の角度からこれらの生態資源の利用を位置づけてみたい。まずは、双方の作物を育んできた環境、そして古代文化の変遷過程を概観しておく。

二 中央アンデス地帯の生態環境と古代文化の変遷

古代アンデス文明が栄えた中央アンデス地帯は、大雑把にいうと、乾燥砂漠地帯としての海岸、アンデスの峰々が連なる山地、アマゾン川源流部の熱帯雨林地帯よりなる。海岸地帯では、アンデス山脈西斜面に源を発する河川が太平洋に対して垂直に流れ込み、その流域は人間の生活の舞台となってきた。また隣接する海域は、豊かな海洋資源を抱える。

一方、山地には、六〇〇〇メートル級の山の頂まで、高度差に応じた多様な生態環境が展開する。熱帯性植物が生える暑く乾燥した谷間から、海拔二〇〇〇メートルを超えて発達する山間盆地、根裁類が栽培される冷涼な高地斜面、さらにはリヤマやアルパカなどのラクダ科動物が飼育される四〇〇〇メートル前後の高地平原などである。さらに山地の東には、アマゾン川源流部が広がる。こうした多様な生態環境の中で、古代文化の興亡過程が把握されているのは、主に海岸と山地である。

古代アンデス文明といえば、インカ帝国が有名であるが、そのインカにしても、十五世紀の後半から十六世紀前半に栄えた一〇〇年にも満たない短命な国家の一つにすぎず、これに先立つさまざまな社会が成立し消滅していったことが最近の考古学的研究からわかっている。

中央アンデス地帯に人類が登場したのは、今から一万一〇〇〇年ほど前の最終氷期の末であった。植物採集に従事しながら、その後絶滅する大型哺乳類を狩猟するという生活を送っていた。やがて、約一万年前頃に氷河が後退すると、変化する環境の中で人類は植物採集と小型動物の狩猟を生業とするかたわら、実験的に植物栽培や動物飼育を試みるようになる。この時代は、アンデス考古学上「石期」と呼ばれる時期と、それに続く「古期」にあたる。前二五〇〇年頃より次第に農業や牧畜への比重が高まり、同時に祭祀建造物が出現する。建造物の建設や祭祀活動を中心に社会はまとまり、中央アンデス各地で類似した図像が登場する。文明の胎動期ともいえ、「形成期」と呼ばれる。本論で分析対象となる時期である。やがて紀元前後の頃から、地方色豊かな文化が開花し、宗教面だけでなく、軍事・経済面での発達が顕著になる。「地方発展期」と呼ばれ、北海岸のモチエや南海岸のナスカなどの社会もこの時代に属する。さらに後七〇〇年頃より、南高地起源のワリ社会が、中央アンデスのかなりの地域に影響を与え、都市空間が発生する。「ワリ期」である。また、ポリビアのティティカカ湖東岸では、その起源こそ形成期にさかのぼるが、ワリと同じ頃にティワナク文化が最盛期を迎え、数々の祭祀建造物が建設され、ペルー南部からチリ北部までにわたる広い範囲に影響力を与えた。後一〇〇〇年頃になると、再び地方色の強い政体が現れ（地方王国期）、その一つである南高地で生まれたインカがやがて中央アンデス全域に覇権を広げるのである（インカ期）。

三 生態資源としてのトウモロコシとジャガイモ

1 導入の過程

さて、このような古代文化の盛衰過程において、ジャガイモとトウモロコシは、いつ登場し、どのように利用されてきたのであろうか。後氷期の中央アンデス地帯で、初めに登場する栽培植物は、インゲンマメ (*Phaseolus vulgaris*)、ライマメ (*Phaseolus lunatus*)、トウガラシやカボチャ、そして、ルクマ (*Lucuma obovata*) やパカイ (*Inga* sp.) などの果実である。これに対して、本論の対象であるトウモロコシとなると、古期の末から形成期の初めにあたる遺跡から、ごくわずかに出土しているにすぎず、しかも他の栽培植物が全て出そろった後に登場するなど、その導入は遅いといえる。今のところ、トウモロコシは中米で栽培化され、そこから南米へ伝播したという説が強いことも、この状況を説明するのに都合がよい。

一方で、ジャガイモはどうであらうか。実際に遺存体が発見されている遺跡や年代は、トウモロコシと大差ない。しかし、オカ (*Oxalis tuberosa*) やツルムラサキ科のオユコ (*Ullucus tuberosus*) など、根裁類の利用が、高地の遺跡で早くから確認されている点は無視できない。またデンプンが主体の根裁類は、トウモロコシなど比べて、地中に残りにくいため、出土しないからといって存在しなかったとはいえない。

特にジャガイモのような高地性の根裁類の栽培化に関しては、山本がラクダ科動物の飼育化の過程と結びつける興味深い論を展開している〔山本 二〇〇四：六一―六四〕。ラクダ科動物の飼育化は、植物の栽培化と並行し、

古期の初めの頃より開始され、少なくとも形成期には完成をみたことがわかっている。これは、ラクダ科動物の生態を人びとが次第に熟知し始めたことも理由の一つだが、高地性の根栽類の栽培化により、四〇〇〇メートルを超える高地でも安定した食生活が可能になったことも関係する。たとえばジャガイモの場合、野生種の中には雑草型のものが多く、人間の活動によつて攪乱された生態の中で成育する性質を備えている。この人間による生態系の攪乱は、ラクダ科動物の飼育化と関係しているという。具体的には、大量の糞が堆積する動物の囲い場の建設などが生態系に影響を及ぼし、雑草型のジャガイモが生み出された可能性が想定されている。

このように考えれば、初期の高地社会においては、トウモロコシ以上にジャガイモのような根栽類が、重要な食糧源として活躍したことが推測できるのである。

2 政治的な作物トウモロコシ

起源はともかく、形成期以降、トウモロコシとジャガイモとともに、中央アンデス地帯において重要性を増す。日本の調査団が発掘したコトシュ遺跡では、土器の表面にトウモロコシの図像が登場し [Izumi & Terada 1972 plate 110: 13]、海岸や山岳地帯の祭祀遺跡からも、炭化した穂軸が出土する [Burger 1992: 72]。とはいえ、トウモロコシ自体が主要な食糧源であったとは考えにくい。有名なチャビン・デ・ワンタル遺跡や、北高地のカハマルカ地方では、当時の食糧に占めるトウモロコシの割合は、さほど多くはなかった点が、近年の科学分析から明らかにされているのである [Burger & van der Merwe 1990; 関・米田 二〇〇四]。むしろ、利用方法にジャガイモとの違いが現れ始めている。形成期については、後述するので、ここでは形成期に続く地方発展期の社会で、両作物の役割の違いをみることにしよう。

地方発展期の北海岸で栄えたモチエは、アンデス文明史上最初の国家といわれ、大規模な建造物、灌漑施設が

築かれ、エリート階層が経済、軍事、イデオロギー面を把握していたとされる。また写実的な表現を伴う土器が製作され、図像研究も進んでいる。植物図像の土器を分析したメアリー・ユーバンクスによれば、トウモロコシ、ジャガイモ、カボチャ (*Cucurbita maxima*/*C. moschata*)、マニオク、ピーナッツ、マメ科のパカイ、ヒョウタン (*Lagenaria siceraria*)、果実のパパイア (*Carica candicans*) やグアナバナ (*Anona muricata*)、食用カンナ (*Canna edulis*) の十一種が同定できたという [Eubanks 1999: 26]。中でもトウモロコシは、彼女が扱った七十五点のモチーフのうちで、じつに三十三点、四十二%を占め、ジャガイモも、トウモロコシに次いで多かった。

しかし、トウモロコシの場合、二十一点、すなわち六割以上の図像で、モチエの神との共伴が認められるという [Eubanks 1999: 27]。一方で、ジャガイモは、単体か、捕虜の像、あるいは人間と合体した形で象られる。イデオロギーとの結びつきは、トウモロコシのほうが強いのである。また、精製土器は、その生産や消費をエリート階層が握っていたことが明らかになっている [Uceda & Armas 1998]。こうした点から、筆者や山本は、トウモロコシを食糧以上の役割を担った「政治的な作物」と位置づけてきた [関 一九九八・山本 二〇〇四]。

さらに山本は、ジャガイモの象形土器の中にチューニョと呼ばれる冷凍乾燥体を確認している [山本 二〇〇四・一〇九]。ジャガイモは、炭水化物が主体の作物であるから保存には適していない。しかし、中央アンデスでは、高地における日中の気温の寒暖差を利用して、ジャガイモ内の水分を抽出した乾燥ジャガイモの生産が考案されたことで知られる。この保存方法が、地方発展期にまでさかのぼると考える山本は、海岸地帯であっても、冷凍乾燥ジャガイモが利用されるほど、ジャガイモの消費が一般化している点を強調している。栄養はイモ類から摂取し、トウモロコシには、別の役割が与えられたという考えである。

トウモロコシの政治性は、図像で表象されるだけではない。酒としての利用を忘れてはならない。実際に貯蔵用の壺は、モチエ期の遺構から検出され、また酒壺を担ぐ人物も土器に描かれる。この酒の利用については、後

代のインカのほうがより明らかである。

3 インカ帝国とトウモロコシ

現代のアンデスの住民たちの食生活に欠かすことのできないトウモロコシは、乾燥させた後に茹でたり(*mote*)、炒ったりして(*cancha*)食することが多いが、利用方法として特異なのは、酒とする点である。伝統的な製法としては、女性が口に含んで噛み砕き、唾液と混ぜ合わせるか、水にひたして発芽させる「アコスタ 一九六六」[9]。ジアスターゼ酵素が入ることで、デンプン質が糖に変わり、発酵することで酒になる(写真1)。その際、広口の壺で二度ほど煮ることが知られ、冷却用に広口壺が、保存用に短頸壺が用いられる[Mueller 1978]。

こうしてできた酒をチチャ(*chicha*)といい、現代アンデスにおいては社会的・政治的、あるいは宗教的な場面で重要な役割を果たしている。たとえば労働に関わる集会や、種まき、収穫、祝宴などで供され、社会集団や血縁集団間の関係を確保する媒介物とみなされることが多い[Allen 1988]。また、しばしば山や大地に棲む神的存在に対してチチャが捧げられ、人間と神的存在との間を結びつける役割が与えられる例もみられる[Isbell 1985]。神的存在との関係においては、見返りとして豊穣や加護が得られると考えられている点で、アンデスの特徴としてしばしば指摘される互酬性をみることができるが、人間同士の関係になると事態はやや複雑である。チチャ饗宴には、つねにホストとゲストの非対称的な関係が存在している。これは労働協力などの形で相殺され、互酬性が維持される場合もあるが、逆に階層的な上下関係を固定化し、強化していく側面を秘めているからである。

この点が明らかなのは、インカ期の社会においてである。スペイン征服後に著された歴史文書では、インカの宗教・政治とチチャとの密接な関係が繰り返し言及される。たとえばグアマン・ポーマ・デ・アヤラの残した絵



写真1 チチャ酒の製造（ペルー北海岸ピウラ地方）



図1 チチャを飲むインカ王 [Guamán Poma de Ayala 1980 (1615)]

(図1)には、月ごとの祭りのうちでも最大のものであるインティ・ライミ (*Inti Raymi*: 太陽の祭典) において、インカ王が口にし、また太陽に捧げられるチチャが描かれている [Guamán Poma 1980]。また作物の植え付けを行う際の儀礼、あるいは祖先崇拜に関わる儀礼においてもチチャは描かれる。

また最近の歴史学の研究でも、チチャの政治的側面が指摘されることが多い [ワシユテル 一九八四]。インカの統治下、土地は三分割され、太陽神とインカ王に捧げられた土地では、トウモロコシを代表とする作物が栽培された。人民に課された税というのは、この土地で働くことであった。しかし収穫物は、必ずしも首都クスコへ運ばれたわけではなく、地方センターの倉庫に貯蔵され、地方行政官がこれを管理したと考えられる。さらに食糧や布などの貯蔵品は、インカ主催の儀礼で消費されただけではなく、インカが国家事業として道路などを建設する場合、賦役 (*ミタ・ナニ*) を課された住民に再分配されたという記録が残っている。中でも貯蔵作物のうちで最も多かったトウモロコシは、支配者側が開く饗宴の際にチチャという形で振る舞われた。この意味で、賦役への反対給付としてのチチャは、支配／被支配の上下関係の確認と強化につながったといえる。

こうした酒としてのトウモロコシの利用は、考古学の成果からも傍証される。インカの地方行政センターであるワヌコ・パンパ遺跡を発掘したクレイグ・モリスらは、首都クスコに似た空間配置を見せる遺構の中に、上質の石材を用いた空間構造を発見している [Morris & Thompson 1985]。ここからは多数の壺の破片と織物の道具が出土しており、歴史文書で言及される、チチャ製造と織物製作を担わされたアクリヤ (*akella*: 処女) の館跡である可能性が指摘されているのである。

こうしてみると、トウモロコシを政治的な作物とし、ジャガイモなどのイモ類を食料基盤として分ける山本の考え方には説得力がある。繰り返すが、筆者もこうした論を展開してきた。しかし、作物を役割で区別するだけでは、文明の形成過程が説明されたとはいえない。この点を論じるために、筆者の調査してきたペルー北高地の

カハマルカ地方の形成期社会をとりあげようと考えてるが、まずは、議論の枠組みを提示しておきたい。

四 権力の形成と基盤となる資源

古代文明の形成過程に関する従来の議論では、余剰生産物の発生などの経済面、そしてそれに加えて政治面に偏っていたきらいがある。前節までの論もこれに含まれよう。しかし、近年では、イデオロギーへの関心が高まりを見せ、これを建築や儀礼などの解析を通して追究するものも増えてきた。さらには、これら複数の側面を統合的に論じる研究者も現れてきた。いずれにせよ、その際にキーワードとなるのが権力という概念である。

本論で注目するのは、首長制社会や国家の形成過程を論じる際に、経済、軍事、イデオロギーという三つの要素を権力資源として捉える研究方法である [Earle 1997, 2002]。ここでいう権力とは、リーダーや支配者が他の人びとに行使する支配力 [Mann 1986: 6] であり、コントロールとは、権力資源へのアクセスを制限する能力 [Earle 1997: 4] と定義しておく。どのように権力や支配組織が築かれるのかを理解することは、どのように権力資源が利用され、コントロールされているのかを知ることと同義であるという立場である。以下にアールの見方に沿って三つの権力資源を整理しよう [Earle 1997: 6-10]。

1 権力資源としての経済

一つ目の権力資源である経済は、生態環境を基盤にできあがっている。たとえば人間の手で生態資源を加工して生まれる生産物やそれを生み出す技術、あるいはモノを獲得する手段としての交換といった対象へのアクセス

を排他的・限定的にすれば、不平等、すなわち権力が発生する基盤となりうる。単純な原理だが、人間が生きていくために必須な食糧などがこれに含まれることを考えれば、その効果が絶大であることに気づく。

アールによれば、市場経済や資本主義経済が浸透する以前の社会では、いわゆる伝統的経済が機能していたという [Earle 2002: 8, 9]。伝統的経済は、生業経済 (subsistence economy) とポリテイカル・エコノミーの二局面を含む。前者は、狩猟、採集、漁労、農耕、いずれの生業でも、生産単位である世帯が、必要最低限の生産物を入手しようとする指向を指し、家族制生産様式ともいわれる [サーリンス 一九八四・五六―一八]。

一方で、ポリテイカル・エコノミーとは、余剰生産物が支配組織やリーダーらの政治的活動や生活を支えるために振り向けられるような局面を指す [Earle 2002: 8, 9]。そこでは、より多くの資源が得られれば、より大きな権力の掌握へとつながるため、増殖や拡大が指向されるといえる。この点で生業経済とは大きく異なる。いずれにせよ、ポリテイカル・エコノミーでは、生産、分配、消費などに対してコントロールが行われるのが一般的である。

このポリテイカル・エコノミーの発展過程を追究するために、二つの経済システムを区別しておこう。主要生産物財政 (staple finance) と富の財政 (wealth finance) である。主要生産物財政とは、一般に穀物、家畜、織物など生活物資を支配組織に納入することを指す [Earle & D'Alroy 1982: 266]。税であれ、共同労働の結果であれ、支配組織が徴収した生活物資は、支配者やその従者などの支配組織を支えるために使用される。これは、生産者 (被支配者) が通常生産しているものを徴収する点で、コントロールも比較的容易である。

一方で、富の財政とは、支配組織への支払い手段として、特殊な財を使用することを指す。この財とは、威信財から貨幣まで、さまざまな対象を含むが、一般に主要生産物に比べて軽く、運搬しやすいものが多いという。したがって、富の財政は、生産、分配、消費とともに、交易に対するコントロールを通じても掌握される

[Earle 1997: 73]。

しかし富の財政は、意外にコントロールしにくい。対象となる財は、固有の価値が付与されて初めて意味を持つことから、イデオロギーと結びつくことが多い。したがって人間の生活に必須な主要生産物とは違って、意味づけの変化によっては、価値が下落する可能性があるという弱点を持つ [Earle 1997: 74]。また逆に価値が上昇しても、運搬が容易であるがゆえに、盗難や強奪、あるいは模造品が作成される危険性を孕む点も弱点といえよう。

ただし主要生産物財政と富の財政は分析概念であり、実態は独立しているとは限らない。主要生産物財政が富の財政を担う専門家集団を支えることもある [Earle 2002: 194]。

2 権力資源としての軍事

第二の権力資源である軍事は強制的な権力行使を展開するものであり、権力の拡大にとつては重要な要素である [Earle 1997: 105]。戦争によって、敵を配下に置き、権力の拡大を図ることが可能になり、逆に競合する他集団の攻撃から土地と成員を守れることもできる。また軍事は、社会内部の統治にも影響を与え、成員が行う貢納への暗黙の強制力となりうる。その意味では、経済に対するコントロールともからむ。さらに権力に歯向かう者に鉄槌を下す手段にもなる。しかし、軍事に弱点があるとすれば、それは、同じ武力が謀反、造反などの原動力になる可能性が高い点にある。いずれにせよ、軍事のコントロールに関しては、セトルメント・パターン（遺跡の分布と地形や生態・自然資源との関係性）、防御的遺構、武器、人骨の殺傷痕、戦闘の図像などの有無を通して判断することができる。

3 権力資源としてのイデオロギー

イデオロギーは、一定の様式の信仰、行為、儀礼、物質文化を通じて、どのように社会や政治組織が成立しているのか、権利や義務がなぜ存在するのかといった社会秩序のコードを示すといわれる [Earle 1997: 143, 144]。権力の行使を制度化する基盤であり根拠を示すものといえよう。しかし、その実態は不可視的な面が強く、また社会内部がつねに同じイデオロギーで染まっているわけではないため、権力資源としては脆弱である。

一般に対象となる社会の構成員が、首長や支配組織が伝えようとするイデオロギーを従順に受け止め、誰もが同じ考えを保有するような均質的社会はありえない。こうした社会の中で、支配組織のイデオロギーを敷衍させるためには、実践によって繰り返し体験を共有し、現実を生み出していく必要がある [Giddens 1979]。ここでは可視化が鍵を握る。

イデオロギーを可視化する手段は四つに分けられる。一つは儀礼的イベントである [DeMarrais et al. 2002: 353, 354]。儀礼、饗宴、演説への参加を通して、経験を共有し、しかもそれを繰り返す行うことで、支配者のイデオロギーを刷り込むことが可能になる。

もう一つは象徴財である [DeMarrais et al. 2002: 354-356]。儀礼用具、壁画、浮き彫り、偶像などの形がとられ、支配者のメッセージを伝える手段となる。また携帯可能な象徴財は、遠隔地のリーダーとの依存・同盟の関係を示すのに効果的であり、また自らの社会内部での流通をコントロールし、上下関係の強化を図ることもできる。

三つ目は公共的記念物である [DeMarrais et al. 2002: 356, 357]。これには、マウンド、ピラミッド、儀礼装置、巨大な建物、政治センター、防御構造物などが含まれる。特に記念碑的建造物は、地理的に広範囲の人びとを教

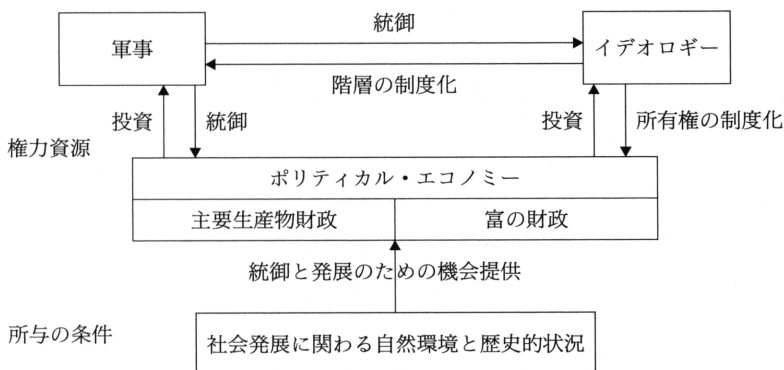


図2 権力資源の相互関係 ([Earle 1997] Fig.6.1 を一部改変)

化し、コントロールし、支配者の宣伝を浸透させるための高い視覚効果が期待できる。しかし、その建設には、労働力と材料が必要であり、計画、管理体制、労働力の組織化も不可欠である。またその規模や不動性ゆえに、急激な価値の変動を受けることは少なく、イデオロギー伝達装置としては恒久性が高い。

四つ目は文字システムである [DeMarrais *et al.* 2002: 357, 358]。石碑や記念碑に刻まれた文字、法令、神話、物語などの文書などは、イデオロギーを直接伝える手段としては有効である。読み書きの技術、文字を扱う専門家のコントロールが権力の基盤となろう。しかし古代アンデス文明では文字が存在しなかったため、この第四点は本論の考察からはずす。

いずれにせよイデオロギーを可視化する装置に関わる技術、生産、流通、消費をコントロールすることが権力の掌握につながると考えられる。

4 権力資源の相互関係

さて以上の三つの権力資源は、どれが重要であるとは一概にいえず、単独では用はなさない。密接に絡み合い、相互依存的な関係を持つ。たとえば権力の拡大過程における相互関係を示してみよう(図2)。経済の余剰は、軍人組織(軍隊)を支え、戦争の拡大を促す。一方で軍事的

拡大は、土地の確保、生産物や労働力、交易ルートの確保など経済面における発展を刺激する。そして戦争は、こうした経済的利益を外敵から守る役割を持つ。

また経済力は、宗教的建造物の建設や儀礼の執行を促し、逆にイデオロギーは、所有権、アクセス権、社会階層の存在理由の表明を通して経済を構造化し、正当化する。そして軍事は、実際に宗教建造物を外敵から守り、一方でイデオロギーは、武器を威信財や儀礼用具として組み込ことを通して、軍事面を正当化していく。

いずれにせよ、個々の社会の支配者の政治的な成功、すなわち権力の獲得は、これら権力資源へのアクセスをいかに限定するにかかっている [Earle 1997: 203-208]。しかも、権力資源の組み合わせや統御されていく様相は、社会によって異なる。しかし、権力資源の統御の容易さの点においては、可視的な物資や技術を対象にすることが多い経済力が卓越している。しかも経済は、元来、人間の組織を基礎に生じるものであるため、生産や技術の統御そのものが、人びと、あるいは組織の直接的な統御と直結する。この点で、経済の統御に比重が置かれるならば、より中央集権的な組織形成が可能になるという見通しは立つ。

そこで上記の権力資源の操作の実態を、筆者が調査に携わってきたペルー北高地カハマルカ盆地のデータをもとに明らかにし、生態資源の利用をめぐる研究に新しい地平を拓いてみたい。

五 ペルー北高地の形成期社会の変化とトゥモロコシの利用

カハマルカ盆地は北東から南西方向に細長くのび、底部の高度は二七〇〇～二八〇〇メートルである(図3)。現在は酪農地帯であるが、トゥモロコシや根裁類などの耕作も認められる。盆地底部に位置するワカロマ遺跡で

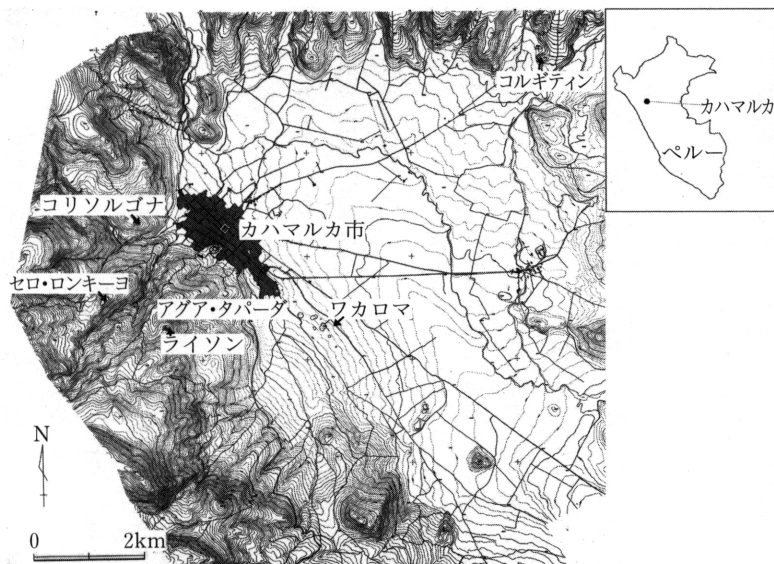


図3 カハマルカ盆地の主な形成期遺跡（コリスルゴナ、セロ・ロンキーヨ、アグア・タバーダはライソン遺跡とともに形成期末期の山上遺跡）

の集中発掘の結果、この地方の形成期は、前期ワカロマ期（前一五〇〇～前一〇〇〇年）、後期ワカロマ期（前一〇〇〇～前五五〇年）、EL期（前五五〇～前二五〇年）、ライソン期（前二五〇～前五〇年）の四時期に細分された [Terada & Onuki 1982, 1985; 加藤・関 一九九八]。次に権力の発生と権力資源の操作の様相を時代順に追うことにする。

1 前期ワカロマ期における権力の様相

まず前期ワカロマ期は、中央アンデス地帯で最初の土器が登場した時期にあたる。薄い器壁を持ち、彩色も限られた粗製土器が製作された。盆地内には大型の公共建造物は見あらず、泥壁でできた多数の小型の部屋がワカロマで確認されている。また盆地では、同時期の遺跡は散在しており、地域ごとのまとまりも認められない。

経済面でいえば、主要生産物財政に関わる資料が少ない。遺跡の立地は、ワカロマを除けば、ほとんどが天水農耕に頼らざるをえないような場所にある。

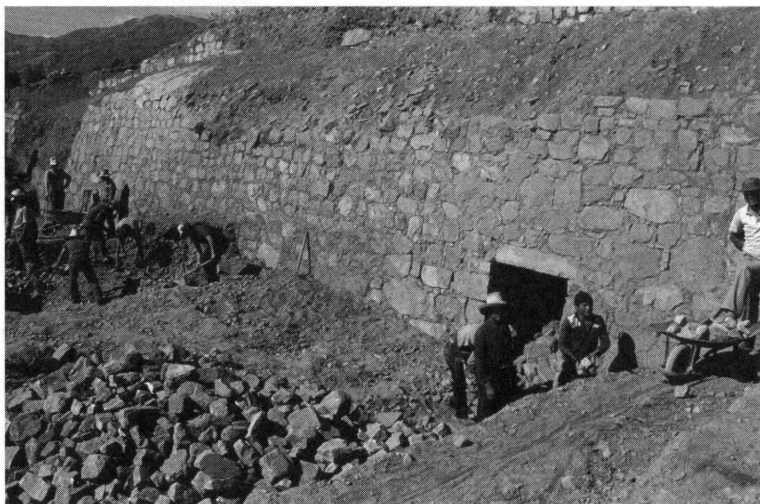


写真2 ワカロマ遺跡の祭祀建造物（東京大学アンデス調査団撮影）

また灌漑施設も発見されていない。この点では、リーダーの権力操作の痕跡が少ないといえる。富の財政に関しても、特殊な遺物は、チリイガイ (*Choronyxius chorus*) 一点のみである。海岸地帯からもたらされたことは確かであり、祭祀に用いられたという報告はよく聞くが [Elera 1994]、交易をリーダーがコントロールしていたというには心もとない。軍事面での証拠は、武器の出土や、人骨の殺傷痕、セトルメント・パターンを含めて、何も見あたらない。

イデオロギー面のコントロールに関わる祭祀に特化した遺構も見出しにくい。ただし、祭祀自体は行われていたと考えられる。たとえば、ワカロマ遺跡では、小型の部屋の床に対照的に配置された一対の炉、あるいは狭い部屋ながらよく焼けた炉が発見されており、こうした空間が日常生活だけに特化したものではないことを示している。狭い部屋で火を焚く儀礼は、形成期遺跡の調査で報告されることが多いのである [Grieder et al. 1988]。

いずれにしても、遺構が小規模であることを考えれば、祭祀に参加する集団の単位は小さかったと考えるべきであろう。このように、前期ワカロマ期では、いまだ社会集団

内部に差異が顕在化しておらず、権力資源の操作の痕跡は少ないのである。

2 後期ワカロマ期における権力の様相

カハマルカ盆地で大型の祭祀建造物が初めて登場するのは後期ワカロマ期である。ワカロマでは、前期ワカロマ期の建物を埋め尽くし、壁画を伴う巨大な基壇が築かれた(写真2)。また土器にも壁画とよく似た幾何学文様や動物の図像が描かれた。建造物の周辺には住居址も発見されているため、村落単位の祭祀場であった可能性が高い。ただし墓の副葬品には差異が見出されないなど、権力を操作する人びとを、特定の階層や支配者集団として比定することはできない。形成期の場合、とりあえずリーダーと呼ぶほうが懸命であろう。

まず主要生産物財政の状況を見てみよう。農具こそ出土していないが、インゲンマメの遺存体、植物の加工に用いた可能性のある石臼や磨石の存在は、農耕の発展を示唆している。しかし、遺跡数は増加するものの、天水に頼らざるをえない斜面や尾根に遺跡が集中するため、集約的な農業の展開はなかったと考えるべきである。ただし、例外的な遺構として、西部の山中を走る水路クンベマーヨには言及しておく必要がある。

クンベマーヨは、カハマルカ市の西南二十キロ、クンベ山の麓の海拔三五五メートルにその源を発し、盆地を見下ろす南西部斜面を経て、カハマルカ盆地底部にまで伸びる総延長九・一キロメートルの水路である[Peterson 1985]。水路の一部は、岩や岩盤をくり抜いて作られ、側壁にはしばしば線刻が施されている。線刻には幾何学文様、ネコ科動物の図像が見られること、凝灰岩の岩盤を加工する技術はワカロマとほぼ同時期の遺跡ライソンでも見られることから、後期ワカロマ期に建設された可能性が高い。

たしかに、この水路沿いには、後期ワカロマ期にあたる大規模な祭祀遺跡が集中していることから、水路を利用した集約的農業が、支持人口の増大につながったと解釈できないこともない。しかし、実際には水路自体の幅

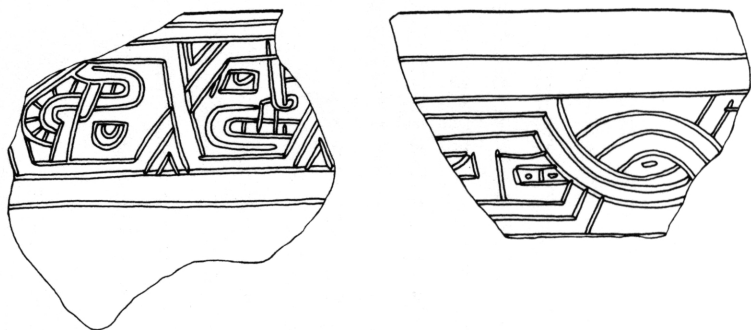


図4 ワカロマ遺跡出土の後期ワカロマ期の土器片（ネコ科の図像が見える）

は狭く、大規模な灌漑施設とはいえないのが実情である。むしろ、線刻画が示すように宗教施設としての性格が強いようにみえる。

また農業以外にも主要生産物財政の痕跡はある。ワカロマ遺跡では、織物自体はともかく、骨製の針や土製の紡錘車が多く出土することから、織物製作をリーダーがコントロールしていた点が推測されるのである。さらに出土するシカの骨の多さは、狩猟の重要性とリーダーによる統御の可能性を示唆するものである。一方で、余剰生産物を備蓄する倉庫などの遺構は見あたらず、主要生産物財政のコントロールは総じて弱かったと考えられる。

次に富の財政をみてみよう。祭祀活動が活発化した後期ワカロマ期には多種多様の精製土器が製作された（図4）。壁画と似た図像が描かれた精製土器は、カハマルカ盆地全域に分布するので流通のコントロールは緩やかであったと思われる。しかし、近年の調査により、材料の粘土の産地は、祭祀建造物が集中する盆地南西部であった可能性が高まっている（四方田 二〇〇三）。流通はともかく、土器製作はコントロールされていたのであろう。

また北海岸起源のクピスニケ様式の土器や儀礼と関係する海産のチリイガイ、あるいは土製品、石器、骨器においても、ペンダント、楽器を想起させる円筒状製品、珪孔雀石のビーズ玉など数多くの装飾品が出土

する。さらに織物製作でも触れたが、大量に出土する針や骨製留めピンの中には、ジャガーなどの動物の図像が彫り込まれた例もあり、奢侈品であつたことが示唆される。富の財政面でのコントロールは活発であつたといえよう。

軍事面での権力操作を語る証拠はないが、イデオロギーに関わる証拠は大量に存在する。ワカロマ遺跡で巨大な祭祀建造物が登場する点は触れた。広場を伴っており、その空間に収容できる人数はかなり多く、前期ワカロマの祭祀を支えていた集団の大きさと比べると、格段の差がある。動物や幾何学文様で飾られた壁画の存在は、より多くの集団に対してイデオロギーを伝達するための装置と位置づけられよう。また、祭祀建造物が一度に築かれたのではなく、三回の更新活動の結果、巨大化している点は重要である。

こうした祭祀建造物の更新過程では、壁画や土器などがいったん壊されては作り直されている。再生された図像は基本的に更新前のものと同じである。さらに、新たな擁壁の建設に際して、裏込め部分に簡易の作業用仕切壁が設けられている点も確認されている。更新の際、集団ごとに作業が分担されていた可能性があるわけだ。

すなわち後期ワカロマ期の社会では、祭祀建造物の更新作業のたびに労働力の統率が必要となつたと考えられるのである。さらに壁画の再生には、熟達した専門家の技術が必要になつたことすら推測させる。いわば祭祀建造物を繰り返し更新することで、労働力や技術（者）を結集させ、伝達するイデオロギーの強化が図られたのである。さらに建造物のほかにもクンペマーヨ水路がある。側壁に見られる線刻からは、水に関わる儀礼との関連性が指摘され、また水路の建設と維持活動にはかなりの労働力が必要であつたと考えられる。

イデオロギーの可視化を担う象徴財としては、土器も重要であろう。土器には、壁画同様に、刻線や彩色でネコ科動物、ヘビ、猛禽類が描かれた。こうした土器の製作がコントロールされていた可能性はすでに指摘してきた。またわずかに出土する北海岸起源のクピスニケ様式の土器は、山地のリーダーたちの権威を高めることに役

立ったのかもしれない。

一方で、祭祀建造物で行われていた儀礼については、ほとんどわかっていない。しかし後期ワカロマ期の場合、更新活動の結果、高さ以上に基壇上の面積が増加していることから、祭祀活動が以前よりも活発化し、リーダーたちの役割が増大したことは確かであろう。

このように、後期ワカロマ期のリーダーはイデオロギー面のコントロールを重視し、軍事面に関心を向けることはなかった。経済面では、水路建設など生産手段へ投資がなされた可能性もあるが、とりわけ祭祀と関わる富の財政をコントロールしようとしたのである。

3 E L期における権力の様相

形成期後期にあたるE L期のワカロマ遺跡では、基壇構造の大半は破壊され、祭祀活動が低下する。土器は多様性に欠け、動物表象は失われ、装飾も減る。

主要生産物財政に関わるデータは、ほとんどない。クンベマール水路については、その周辺に遺跡が集中することから、引き続き利用されたと考えられる。また粘土採取も引き続き重要であったのだろう。いずれにせよ農業生産性の向上を示す証拠は希薄なのである。

一方で生業面での変化の兆しも若干見える。動物飼育である。E L期になると、出土するラクダ科動物とシカ科動物の割合が拮抗するようになる。一般にラクダ科動物は、高地での飼育に適しているため、盆地周辺の山上における牧畜の開始が示唆されるが、遺跡の分布に特に変化はない。また獣毛の利用についても、針やヘラなど織物製作に関わる遺物の出土が減るというワカロマ遺跡の報告からは、コントロールの強化を検出することもない。さらに盆地外からの交易品が、前代と比べても格段と少ないことから見ても、ワカロマ地域で暮らす集

団の規模が減少し、リーダーの権力は弱体化したと考えられる。

軍事面の証拠はいかかわらず目立たない。遺跡の立地は前代と変わらず、また城塞型の遺跡や武器も検出できないため、総じて軍事のコントロールはなかったと考えるほうがよい。

最後になるが、イデオロギー面のコントロールも明らかに弱体化している。大規模な祭祀建造物自体が放棄され、壁画も消えた点は、恒久的な祭祀建造物という可視的媒体を介した従来型のイデオロギー操作が衰退したことを示す。これは伝達装置ばかりか、祭祀建造物の更新という点からするならば、建設に関わる労働力の統制、集団の組織化という機会を失ったことになり、リーダーの権力は間違いなく弱体化している。また象徴財としての土器においても、前代の様式が踏襲されているとはいえ、具象的な図像が消失している。ただし、ある種のタイプの土器については、盆地外で活発な祭祀活動を展開していたクントウル・ワシ遺跡より出土するものと共通性が高く、交流が行われたと考えられる。盆地における社会発展の停滞から判断するならば、むしろカハマルカ盆地の社会は、盆地外にイデオロギーを求め、リーダーは、これに依存していたとも考えられるのである。

4 ライソン期における権力の様相

形成期最後のライソン期になると、ワカロマ遺跡の公共的な性格は全く失われ、居住空間へと変貌する。代わって、公共的な性格の建物は、盆地を見下ろす南西側の山頂に集中するようになる。この時期を命名するものとなったライソン遺跡もその一つである。

まず経済的側面に注目してみよう。ライソン期には主要生産物財政に大きな変化が生じている。ラクダ科動物が出土獣骨の大半を占めるようになり、この動物の飼育に適した高所に位置する遺跡の数も急増するのである。しかも、大規模な基壇建築が尾根上に集中する点は、ラクダ科動物のコントロールと関連するものであろう。ま

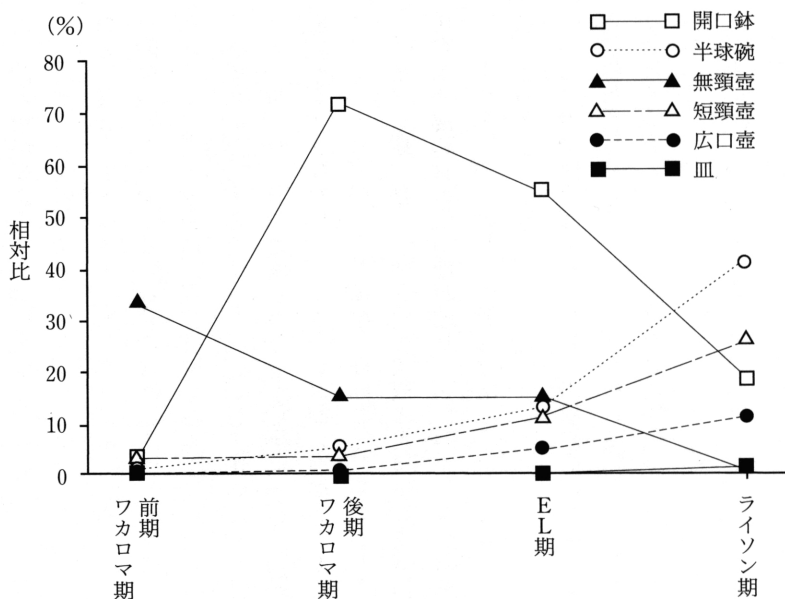


図5 ワカロマ遺跡における土器の器形の時代的变化

た、ワカロマ遺跡では高所で栽培されるキヌアらしき花粉が得られており、出土こそしてはいないが、高地性の根裁類も、牧民集団の生活を支える重要な役割を担っていた可能性は高い。

ラクダ科動物以上に注目したいのはトウモロコシの遺存体の出土である。トウモロコシの消費に関しては、科学分析により、EL期にさかのぼることがわかっている。問題は、この利用が酒であったかどうかという点である。これについては、援用できる研究がある。

時代はやや下るが、ペルー中央高地のマンタロー盆地でトウモロコシの利用変化を追究した事例がある [Haslort & Johannesen 1993]。マンタロー盆地の調査では、地方発展期のワクラプキオ期（後四五〇〜九〇〇年）、ワリ文化並行期であるワンカI期（後九〇〇〜一三〇〇年）、地方王国期のワンカII期（後一三〇〇〜一四三〇年）、そしてインカ期にあたるワンカIII期（後一四三〇〜一五三二年）という編年が確立されている。特にワンカIII期以降でトウモロ

コシの利用が高まることが指摘されている。

ここで興味深いのは、ワンカII期についてである。この時期には、遺存体の出土数が減少するのだが、科学分析の結果は、引き続きトウモロコシの利用が行われたことが示唆されるという。同時に穀粒が増大し、それに伴い穀粒の列も減少している。これは醸造酒チチャ用トウモロコシの導入と考えられている。さらに、この変化と並行して、チチャ製造過程で必要な石製磨砕具や大型の広口の壺や短頸壺が増加している。これらは、現在ペルー各地で観察できるチチャの製造過程で用いられるものと一致している。

じつは、ワカロマ遺跡のライソン期でも同様の短頸壺や広口壺などが増加している(図5)。マンタローほど緻密なデータはないが、トウモロコシの増加と土器の器形変化とが連動し、酒の利用を示唆しているのである。ではチチャはどのような脈絡で操作されたのであろうか。

ライソン期には、盆地を望む尾根に大規模な建造物が築かれた。既述したように、南西の尾根には、土器製作用粘土や混和材の産出地があり、クンペマヨ水路も流れる。ライソン期においても、土器製作や多少の農業のコントロールが行われた可能性はある。土器自体がチチャ酒の製造に関係したと想定するならば、この見方は不当とはいえないだろう。

さらに盆地南東部では、複数の円形構造物を伴う基壇建築が近年報告されている。未発掘ではあるが、倉庫の可能性は否定できない。リーダーによる物資のコントロールが始まった可能性が示唆される。一方で、富の財政におけるコントロールは、反対に弱体化がうかがわれる。長距離交易を想起させるような遺物の出土は希なのである。

軍事に関しては、ようやく証拠が出てくる。第一に遺跡の分布である。尾根など、防衛や攻撃上重要な場所に遺跡が分布し、社会的緊張の高まりが示唆されるのである。特に海岸や隣接する谷間に抜ける南西部と南東部の

尾根に遺跡が集中する点は、外部の集団を意識した配置といえよう。この点は、ライソン遺跡における建築軸の変化とも連動する。

これまで述べてこなかったが、ライソン遺跡は、ライソン期だけではなく、それ以前の後期ワカロマ期にも利用されていた。後期ワカロマ期の祭祀建造物は、尾根の西側を正面として築かれたことがわかつている。おそらく盆地底部へと通じる西側の涸れ谷を意識してのことであろう。下りた先の盆地底部にはワカロマなど祭祀建造物とその周辺で暮らす集団が存在していたのである。このように、ライソンは、水や粘土をコントロールすると同時に、盆地底部の社会とイデオロギー上、密接な関係を結んだと考えられる。

ところがライソン期に入ると、西斜面は放棄され、建物の中心軸が南北に変化する。ライソン遺跡の南側には、山を超えて海岸地帯へと向かう古道が存在し、現代の住民もこの道を利用してゐる。その点からすれば、中心軸の変化は、盆地内部から外部への関心の転換、あるいは盆地外の社会との緊張関係を示すものといえよう。また武器である棍棒頭や投石用の石がワカロマ、ライソン双方から出土していることも闘争の存在を示唆している。

最後にイデオロギー面を考察してみよう。ライソン期の大規模建造物は、立地などから軍事的性格が強いようにみえる。しかし祭祀性がないわけではない。中央基壇の頂上部やその基壇が載るテラスでは、円形構造物、基壇、複雑な構造の炉が検出され、石偶、磨製石板、水晶など特殊な遺物が出土しているのである。なお中央基壇は、整然と積み上げられた石と土などの充填材よりなり、建設の計画性や労働のコントロールがうかがわれる。

しかし後期ワカロマ期とは大きな違いが存在する。建物の壁面を飾る動物の図像が姿を消すのである。これは土器にもあてはまる。幾何学文様が主体となるなど、イデオロギーを伝達するための手段に大きな変化が生じているのである。代わってイデオロギー面における主役がトウモロコシの酒に移った可能性については、前に触れたとおりである。トウモロコシ酒の利用については、さらに検証を重ねる必要があるが、軍事面の証拠が示すよ

うに、緊張関係にある集団間の融和や社会内部の不平等を甘受させるために、酒が振る舞われ、酒に関する儀礼が行われたと考えることはさほど不合理とはいえない。

しかし、形成期末期という言葉が語るように、リーダーによるこの新たな権力資源の操作方法は、経済、軍事を含め、不消化に終わるようである。ライソン遺跡では、同じライソン期内で、大規模な建造物は機能を停止し、権力の様相は混沌と化しているからである。

六 権力資源のコントロールと複合社会の成立

さてこれまで中央アンデス地帯北部地域での発掘データを中心に、当時の社会のリーダーらが、どのように権力資源を利用し、社会の集権化を図ろうとしてきたのかを見てきた。そこで注目したのが、経済、軍事、イデオロギーという三つの権力資源であり、これをどのように組み合わせる権力を掌握しようと試みたのかという視点でデータを解釈してきた。総じて見ると、カハマルカ盆地の形成期社会ではポリティカル・エコノミーの発達は限定的で、階層を示す証拠も少ない。主要生産物財政は形成期全期間を通じて未発達であるものの、形成期末期（ライソン期）では、ラクダ科動物やトウモロコシに対するコントロールが本格化する。一方で、富の財政に関する証拠は、特に祭祀活動が活発化する後期ワカロマ期で確認され、主要生産物財政での変化が認められる形成期末期では衰退している。

軍事に関する証拠は、形成期末期を除けば希薄であった。土地の所有と結びつく主要生産物財政の未発達は社会的緊張を誘発しなかったのだろう。事実、主要生産物財政に変化が認められる形成期末期に軍事面の萌芽が認

められるのはこの見方を裏づけるものである。

一方でイデオロギー面には目立つものがある。後期ワカロマ期では、巨大な祭祀建造物が築かれ、更新され、儀礼も活発に行われた。いわば主要生産物財政の未発達にもかかわらず、イデオロギーに対するエネルギーの投与やコントロールが進行していたことになる。その意味で同じポリテイカル・エコノミーでも、イデオロギーに関連した富の財政が増殖する傾向を示しているのは理解しやすい。

こうした富の財政やイデオロギーに関わる権力資源のコントロールが一時期隆盛を極め、やがてこれが形成期末期に衰退する。複雑な図像の消失など、イデオロギーの可視化を担う従来の装置が放棄され、軍事の証拠が現れる。ちょうどこの頃に、トウモロコシ農耕やラクダ科動物の飼育といった新たな生業が顕在化し、ポリテイカル・エコノミーの中でも、主要生産物財政面で新たな局面を迎える。特にトウモロコシの酒を用いた儀礼が導入され、経済面とイデオロギーとの結合が図られるようになった可能性が高い。アンデスでは、酒が社会の不平等性を固定するような儀礼や再分配と関連してきたことを考えると、社会統合や集団間の緊張関係の緩和に結びついたとすることも的外れとはいえない。

ある意味で、これまで関連してこなかった主要生産物財政と戦争、イデオロギーとの結びつきが始まり、リーダーたちがより複合的に権力資源をコントロールしようと試みたといえよう。こうした権力資源のコントロールを媒介した生態資源がトウモロコシであった。

しかしながら、この権力資源利用の組み換えは、順調とはいえず、やがて形成期社会は終焉を迎える。おそらく、後にアンデスで重要になっていく酒が登場したものの、イデオロギーの可視化を放棄せざるをえなかった点が問題であったのだろう。事実、続く地方発展期のモチエでは、酒を儀礼に用いながらも、図像を伴う土器や建造物など再びイデオロギーの可視化にエネルギーを注ぎ、国家規模の複合社会を成立させているのである。

以上、考察してきたように、古代社会における権力の様相を解明するためには、単に経済、軍事、イデオロギ―という各側面だけに注目するのではなく、権力資源としての組み合わせを観察することが必要なのである。いかえれば、食糧としての作物や政治性の高い作物を区別しただけでは、複合社会の成立過程を追うことはできないことになる。その意味で、形成期においては、トウモロコシが権力資源を媒介し、権力の様相を描写する資源として活躍した一方で、ジャガイモなどの根栽類には、その役割が付与されることがなかったことが本論で明らかになったといえよう。とはいえ、この点については、単純に一般化するのではなく、後に現れるティワナクなど、根栽類の栽培に適した高地で成立した複合社会でどのような権力操作が行われたのか、検討を加えた上で、改めて考察することが必要であることを付け加えておきたい。

参考文献

- アコスタ、J 一九六六（原著一九九〇）『新大陸自然文化史』（増田義郎訳）岩波書店。
加藤泰建・関雄二編 一九九八 『文明の創造力』角川書店。
サーリンズ、M 一九八四（原著一九七六）『石器時代の経済学』法政大学出版局。
関 雄二 一九九八 「考古遺物と社会変化―南米ペルーの形成期末期におけるトウモロコシをめぐる―」『民族学研究』六二巻四号、五六三～五七二。
関 雄二・米田穰 二〇〇四 「ペルー北高地における食性の復元―炭素・窒素同位体分析による考察―」『国立民族学博物館研究報告』二八巻四号、五一五～五三七。
山本紀夫 二〇〇四 『ジャガイモとインカ帝国』東京大学出版会。
四方田慎介 二〇〇三 『先史アンデス文明考古学試料への地球科学の応用―鉱物科学からの貢献―』（富山大学大学院理工学研究科修士論文）。

ワシントン・D・C. 一九八四(原著一九七二) 『敗者の創造力』(小池佑二訳) 岩波書店。

Allen, C. J. 1988 *The Hold Life Has: Coca and Cultural Identity in an Andean Community*. Washington D. C.: Smithsonian Institution Press.

Bennett, W. C. 1948 "The Peruvian Co-Tradition." In *A Reappraisal of Peruvian Archaeology*, pp. 1-7. Menasha: The Society for American Archaeology and the Institute of Andean Research.

Burger, R. 1992 *Chavin and The Origins of Andean Civilization*. London: Thames and Hudson.

Burger, R. & N. J., van der Merwe 1990 "Maize and the Origin of Highland Chavin Civilization: An Isotopic Perspective." *American Anthropologist* 92 (1): 85-95.

Brush, S. B. 1977 *Mountain, Field and Family: The Economy and Human Ecology of an Andean Valley*. Pennsylvania: University of Pennsylvania Press.

DeMarrais, E., L. J. Castillo & T. K. Earle 2002 "Ideology, Materialization, and Power Strategies." In T. K. Earle (ed.), *Bronze Age Economics: The Beginnings of Political Economies*, pp. 348-385. Boulder: Westview Press.

Earle, T. K. 1997 *How Chiefs Come to Power: The Political Economy in Prehistory*. Stanford: Stanford University Press.

Earle, T. K. 2002 *Bronze Age Economics: The Beginnings of Political Economies*. Boulder: Westview Press.

Earle, T. K. & T. D'Altroy 1982 "Storage Facilities and State Finance in the Upper Mantaro Valley, Peru." In J. Ericson & T. Earle (eds.), *Contexts for Prehistoric Exchange*, pp. 265-290. New York: Academic Press.

Elorza, C. 1994 "El shamán del Morro de Elen: antecedentes arqueológicos del shamanismo en la costa y sierra norte del Perú." In L. Millones & M. Lemlij (eds.), *El Nombre del Señor*, pp. 22-51. Lima: Biblioteca Peruana de Psicoanálisis.

Eubanks, M. W. 1999 *Corn in Clay: Maize Paleoethnobotany in Pre-Columbian Art*. Gainsville: University Press

of Florida.

- Flannery, K. V. 1965 "The Ecology of Early Food Production in Mesopotamia." *Science*. 147: 1247-1256.
- Giddens, A. 1979 *Central Problems in Social Theory*. London: Macmillan.
- Grieder, T., A. Bueno Mendoza, C. E. Smith, Jr. & R. M. Maina 1988 *La Galgada, Peru: A Preceramic Culture in Transition*. Austin: University of Texas Press.
- Gumán Poma de Ayala, F. 1980[1615] *Nueva crónica y buen gobierno*. Mexico: Siglo Veintiuno.
- Hastorf, C. & S. Johannessen 1993 "Pre-Hispanic Political Change and the Role of Maize in the Central Andes of Peru." *American Anthropologist* 95 (1): 115-138.
- Isbell, B. J. 1985 *To Defend Ourselves: Ecology and Ritual in an Andean Village*. Prospect Heights: Waveland Press.
- Izumi, S. & K. Terada 1972 *Andes 4: Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Lynch, T. F. 1973 "Harvest Timing, Transhumance, and the Process of Domestication." *American Anthropologist* 75: 1254-1259.
- Lynch, T. 1980 *Guianero Cave: Early Man in the Andes*. New York: Academic Press.
- MacNeish, R. S., R. K., Vierra, A. Nelkin-Terner, R. Lurie & A. Garcia Cook 1983 *Prehistory of the Ayacucho Basin, Peru, Vol. IV: The Preceramic Way of Life*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Mann, M. 1986 *The Source of Social Power*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Masuda, Y., I. Shimada & C. Morris (eds.) 1985 *Andean Ecology and Civilization*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Morris, C. & D. E. Thompson 1985 *Huánuco Pampa: An Inca City and its Hinterland*. New York: Thames and Hudson.

- Muelle, J. C. 1978 "La chicha en el distrito de San Sebastián." In R. Ravines (ed.), *Tecnología Andina*, pp. 241-251. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.
- Murra, J. V. 1972 "El control vertical de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las sociedades andinas." In I. Ortiz de Zúñiga, *Visita de la provincia de León de Huánuco 1562*, Tomo II, pp. 427-468. Huánuco: Universidad Nacional Hermilio Valdizán.
- Murra, J. V. 1975 *Formaciones económicas y políticas del mundo andino*. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.
- Onuki, Y. (ed.) 1995 *Kuntur Wasi y Cerro Blanco*. Tokyo: Hokusen-sha.
- Petersen, G. G. 1985 "Cumbemayo: agnado arqueológico que cruza la divisoria continental." In F. Silva Santisteban et al. (eds.), *Historia de Cajamarca*, pp. 97-100. Cajamarca: Instituto Nacional de Cultura.
- Service, E. R. 1975 *Origins of the State and Civilization: The Process of Cultural Evolution*. New York: Norton.
- Steward, J. H. & L. C. Faron 1959 *Native Peoples of South America*. New York: McGraw-Hill Book Company.
- Terrada, K. & Y. Onuki (eds.) 1982 *Excavations at Huacaloma in the Cajamarca Valley, Peru 1979*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Terrada, K. & Y. Onuki (eds.) 1985 *The Formative Period in the Cajamarca Basin, Peru: Excavations at Huacaloma and Layzón, 1982*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Uceda, S. & J. Armas 1998 "An Urban Pottery Workshop at the Site of Moche, North Coast of Peru." In I. Shinada (ed.), *Andean Ceramics: Technology, Organization, and Approaches* (Research Papers in Science and Archaeology, Supplement to Volume 15), pp. 91-110. Philadelphia: University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology.
- Wittfogel, K. A. 1957 *Oriental Despotism: A Comparative Study of Total Power*. New Haven: Yale University Press.
- Webster, S. 1971 "An Indigenous Quechua Community in Exploitation of Multiple Ecological Zones." In *Actas*

y *Memorias del XXXIX Congreso Internacional de Americanistas*. Tomo 3, pp. 174-183. Lima.
Willey, G. R. 1971 *An Introduction to American Archaeology, Volume Two, South America*. New Jersey: Prentice
-Hall, Inc.